

母の前でぼうっとしていたら、突然頭に質問が浮かんだ。今まで思いつかなかった質問だ。

でも、もしかしたら聞いてはいけないことかもしれない。けれど、私は今の関係を壊してでも聞きたかった。今の関係なんて全く良いところがないのだから。

かすかな期待が私を駆り立てて、疑問を口に出させる。

どうして、お母さんは部屋を出ないの？ どうして、お父さんと話をしないの？

母はこちらに顔を向けて、少し黙った。私は、ごくりと固唾を呑んだ。

電気が通っているかのようにぴりぴりとした沈黙が痛い。そしてそんな空気を我慢していると、何回も聞いたような私を適当にあしらう返事が返ってきた。

期待が悲しみに変わり、雪のように降り積もって古い悲しみを覆った。

話す気力が失せて、私は母の部屋をうつむきながら離れ、きしきしと音をたてて二階の自室に帰った。

いつからだろう、三人が揃って食事をすることがなくなったのは、各自で銀行からお金を引き出して、各自が自分一人の空間と時間で過ごすようになったのは。

いつからだろう、こんなに私たちの仲が悪くなってしまったのは。

以前はこんなに疎遠じゃなかった。特に母とは仲が良かった。一緒に買い物に行ったり映画を見に行ったりして、私が悩んで泣いてしまった時には優しく慰めてくれた。そう、包み込むような優しさで。

最高の家族だった。

じゃあ、こんな日常はどれくらい続いているの？ 一年？ それともたった三日？

忘れてしまったけれど、きっと長くは続いてない。だって、こんな生活を二週間も続けてたら発狂してしまうから。

じゃあ、何がきっかけで、いきなりこうなってしまったのだろうか。私が何かとんでもないことをしてしまったからなのだろうか？ 何が悪かったのだろうか？ 私が急に変わってしまったのだろうか？

……でも、もう答えは分からない。答えてくれる人がいないのだから。

家にいる気が全く起きないから、かなり早めであるけれども、家を出て学校へ向かうことにした。沈んだ気持ちのまま授業の用意をして、昼食用の食べ物を手探りで選ぶ。

私物の山の中から、少しシワになって薄汚れている、紺色の制服を探し当てて着替える。

少しでも望みが叶うように、私は両親への挨拶を忘れない。だから、家を出る時には「いってきます」を欠かさないのだ。

外はいつものようにうっすらと雲がかかって暗いものの太陽は見えていた。何だか、今日は違う一日になる気がした。

……まあ、自然の変化にこじつけて幸せを期待するのも、何回目かのことなのだけれど。

そして、なるべく嫌なことは思い出さないようにして歩き出した。

朝らしい静けさの中、近所の人々が陽気に挨拶をして他愛のないことを話す声が微かに聞こえる。

住宅街を通り抜けると、大通りに出た。静けさはすぐに壊される。

多くの車が、運転者の心を映し出しているかのように、うるさく音を立てながらひたすら前へと走っていく。固い顔立ちの鉄の塊が、ここではない何処かを目指して真っ直ぐに突き進む。

多くの人々が、時間を惜しむかのように前へと歩いたり自転車を走らせたりしていく。馬鹿みたいに必死になって突き進む人みれば、意味の無いおしゃべりを互いに繰り返しながら進む人もいる。

赤信号を無視する人がたくさん居る。時には青になるまで待っている人も居るけれど、イライラしながら時計と信号を交互に見ている。

みんなが、他を追い越そうとして速度を上げていく。規則を守ってゆっくりと動いている動体は他の奴らに睨まれる。

こうして、ヒトとクルマと街が、混み合っって一つの音楽と波を作り出していく。無機質のようで実は感情が混沌としている、私のような歪んだ人間には心地良いモノ。こんなに綺麗なのに、人々がその作品を鑑賞するために留まることはほとんどない。彼らが居たという痕跡を全く残さずに、彼らは何処かへ行ってしまふ。

でも、よく考えてみると、だからこそ音楽と波になるんだろう。

それらは、今に対する無意味さという犠牲が産み出した、今だけしか味わえない芸術。

私のような人間には芸術となって価値があることを、浮いているように過ごす彼らに知らせてあげたならば、どうなるだろうか。彼らにとって救いになるだろうか。

……それとも、私が救われるのだろうか。

そんなことを考えている内に、最寄りの駅に着いていた。

ぼうっとしている間に乗り過ぎてしまっって、結局学校に着いたのは八時半ぎりぎりだった。

慌てて、ばたばたと教室に向かう生徒や、時間を気にせずに雑談を続ける生徒がごちゃごちゃと居る中で、一人歩きながら教室に進んだ。後ろの扉から入っってすぐに、担任が前から入っってきた。

授業中もぼうっとしていて、気付いたら昼食の時間になっていた。

私にはよく話す友人が一人だけいる。幸い同じクラスの子で、きっと私と同類の子。人付き合いが苦手で、でも一人ぼっちには堪えられないという少し歪んだプライドを持っている。だから、自分を拒絶しないような話し相手を求めてる子。

私達は会っってすぐに相手が自分と似ていることに気づいた。そしてすぐに周囲から仲良しと認められる位になった。でも、細かく私達のことを観察すれば、決して仲良しなんて関係じゃないことに気づくだろう。

まず会話が成り立っていない。どちらかが自分のことについてべらべらと喋っって、相手は相槌を打っただけ。相手の趣味に興味を持つこともないし、相手をもっ と深く知ろうとしたこともない。互いの家は近いのに、相手の家に遊びに行くこともないし、自分の家に誘っったこともない。あだ名で呼び合っっているから、本名 を忘れてしまっうことも多い。

そして本名なんて知っっている意味がない。

ただ一方的に話しかけてるだけ。人形に語りかけているかのよう。

けれど、今日はいつもと少し違っった。彼女は見るからに落ち込んでる。話しかけても返事がない。何か悩みでもあるのだろうか。だとしたら私は彼女に問いかけて話を聞いてやらなければならない。一応友達として当然の行為はしなければ周りから不審に思われるから。

そう考えていても、私は行動に移すことを躊躇した。なぜなら、もし彼女の悩みを聞いて相談という形になっってしまったならば、私は彼女と深く関わることになるからだ。それは私の信条に反する。もちろん、彼女もそれを望んでいないだろう。

最悪、悩みを聞いてしまっったことで彼女と根本的に考えが違っうことが分かって、私達の間を終わらざるを得ないということになるかもしれないのだ。それだけは回避したかった。

そうして戸惑っっているうちに、昼休みが終わっった。そのまま考え込んでるうちに、あっという間に午後の授業も終わっってしまった。

放課後になった。クラスメイトたちは、きゃいきゃいと騒ぎながら教室を出て行く。いつのまにか少しオレンジ色に染まっった教室の中にいるのは私達だけになっっていた。私も彼女も自分の机でじっと考え込みながらその場にいた。

こうしていても仕方ない。私は勇気を出して立ち上がり、ゆっっくりと、彼女に近づいた。自分が緊張していることは明らかだった。

彼女の机に近づくたびに心臓の鼓動が速くなっていく。汗まで一筋つうと垂れてきた。

割れた破片を扱うかのように彼女の肩にそっと触れて、はっきりと問いかけた。

今日は一体どうしたの？ 何か悩み事でもあるの？

彼女は驚いて、ぱっとこちらに顔を向けた。私がそうやって真っ直ぐに聞くとは思っていなかったらしい。おそらく彼女も私と同じように相談するかどうか迷っていたのだろう。

静寂が二人を包む。開け放された窓から入る、運動系の部活の人々の声が異様に大きく聞こえる。私は彼女が言葉を発するまで待った。そうした方がいいと、どこかの本で読んだ気がしたから。

どれくらい時間が経ったのだろうか。ようやく彼女が、うつむきながら口を開いた。空は少し赤紫色に染まっていた。

「……ここじゃ話し……たくないから、その……私の家に後で来てくれない……？」

ぼつりと、弱々しく彼女はそう言った。私は快くうなずいた。もしかしたら、何かが良い方向に変わるかもしれない。

五時半に彼女の家に行く約束をして彼女は学校を離れた。

約束の時間まで少し余裕があったけれど、家には戻りたくなかった。学校の図書室で暇をつぶそうと思って向かった。

図書室独特の匂いが入るとすぐにたちこめた。司書の先生が神経質なのだろうか、いつも完璧とでも言っているほどに分類や整頓がなされている。

評論とかの固い本を読むと頭が痛くなるから、小説のコーナーへ向かった。すぐ近くにあった恋愛物の棚を素通りした。恋愛経験が皆無に等しい私は、そんな系統の本を読んでも少しも共感も感動も出来ないからだ。

私が読みたいと思うのは、そう、「今」から抜け出せる小説。例えば殺人事件とか、異常心理とか、過激な物。間違ってもSFとかファンタジーじゃない。だって、私が求めているのは「現実」に潤いを与える何かだから。

内容を確認していくのも面倒だったから、タイトルが目を引く本を探した。シリーズ物を読む気にもなれず、また、長編を読むほどの時間はなかった。短編集らしき本から探していったけれど、私の心に響く題名はなかなか見当たらなかった。

どうしようかと迷っていた時、突然頭がぐらりと揺れた。それを感知した後、周り全てが少し揺れているのだと気づいた。弱い地震だった。図書室の中の、安定の悪い位置にあった本が数冊、床に落ちた。すぐに揺れは収まり、少し雑然とした部屋に変わった。

床の上に、開いて文章が見える本が一冊目に入った。それを手にとって、ぱらぱらと読んでみた。短編だった。

これを偶然の出会いと言うのかもしれない、と思って最初から読み始めた。

すぐに読み終わった。その話はとても面白かった。どこが、どうして面白いのか、とは言い表せないような話だったけれど、なぜか読み終わった後に「読んでよかったなあ」と思った。

そして少し考え込んだ時、ふと何かに気付いて、すぐに思考が止まった。

実は、私はこの本を読んだことがあったのだ。最後まで読んで頭の中を整理しないと思いつけない位に印象に残っていない本。そして、私の感性が磨かれたわけでもない。

つまりは、面白くなかった本。

私は、急に機嫌が悪くなって、本を少し乱暴に閉じて適当な本棚に返した。

もしかしたら、今の私にはどんな本でも面白いのかもしれない。

そうか、きっとそうだ。もう私は駄目なんだ。頭の中がスカスカで、さらに乾いているんだ。

……いけない、これ以上自己嫌悪していたら、また暗い思考回路にのめり込んでしまう。

私は、自分とは不釣り合いな図書館を後にして、少し約束よりも早めだけれど彼女の家に向かった。

彼女の家は私の家とは違って綺麗なマンションで、住所だけは知っていたけれど一度も立ち寄ったことはなかった。一階の一番左端の、彼女の家のドアの前に立った。少し緊張した。

ピンポン。

チャイムを鳴らして少し待ったけれど、返事はなく、ドアも開けられることはなかった。

しまった、早めに来すぎてしまったのだろうか。彼女の学校での状況を見る限りでは、そのまま家に向かったものと思ったのだが。

ピンポン。

もう一度鳴らしたけれど同じだった。

一応鍵がかかっているかどうか確かめた。がちゃりと音がして開いた。私は不思議に思ったけれど、もしかしたら部屋で悩み込んでいるのかもしれないと気付いて家に入ることにした。

おじゃまします、そう言ってこっそりと入ったけれども、やっぱり誰もいないように感じた。玄関や廊下の電気はついておらず、かちゃりとドアが閉まった後にはかなり暗くなった。左右を見ると、少し黒く壁や床が汚れていた。

前方を見ると、一つの部屋から光が漏れていた。嫌なことを思い出したけれど、彼女がいるのが確認できてほっとした。廊下も薄汚れていて、新築のマンションの外見からは想像ができない位だ。

その部屋に近づくと、ドアには彼女の名前の書かれたプレートが掛かっていた。そして、ドアを開けた。

その日、私は彼に出会った。彼女の家、彼女の部屋で出会った。彼女は部屋にいないくて、代わりに彼が座っていた。

足を投げ出した姿勢で壁にもたれかかっていた。美形というわけではなく、背は低い方だった。多分私よりも年下だろう。

彼は笑っていた。笑みを絶やさなかった。そして同じ笑みが張り付いていた。

彼は赤い色にまみれていた。服も、手も、足も、体中赤く染まっている。それなのに顔には一点の曇りも無く、ただ純粹な、無垢としかいいようのない笑みを浮かべていた。眠っているみたいだった。顔色は病的に白かった。彼の手にそっと触れてみた。冷たかった。

私は彼が気に入った。

彼を家に連れて帰ることにした。後で返しに来よう、と思って無断で台車を借りた。誰にも見つからないように、こっそりとマンションを出て、注意深く見回しながら裏道を通って。少し苦労したけれど、なんだか楽しかった。

家に帰った時にはかなり辺りは暗くなっていた。ドアを開けて、台車ごと彼を玄関へ入れた。

ただいま、そう言ったけれど返事はなかった。私は台車と一緒に左右の部屋へ向かった。がらがらと音を立てて沈黙を醜く壊していく。

扉を開けて彼を見せて、「驚いた？」と二人に尋ねた。

無邪気な子どもみたいに笑って。

左の部屋では、父は何も見えていないかのように、私の方も見ずに辺り障りの無いことを言った。右の部屋では、母は無言のまま、私を見るどころか何の返事も返ってこなかった。

深く沈んだ私の目の前で、食卓の電気が酷く微かな光を発していた。

きっと二人とも、馬鹿な娘だと思って呆れているのだ。きっと完璧に軽蔑された。だったら怒るとか泣きつくとかしてくれればいいのに。

どうして私を見てもくれないの？ どうして構ってくれないの？

……もう、二度とまともに話しかけてこないのかな、彼らは。

彼を苦労して部屋に連れていき、その日は彼と部屋でずっと一緒に過ごした。やっぱり彼は笑顔のままで、一言も、何も話してくれない。それでも私は彼に話すことを、楽しいと感じた。何度も、嬉しくて彼を抱きしめた。彼は嫌がる素振りも無く、ただ笑っていた。

いつのまにか朝か訪れていて目が覚めた。私は彼の隣で壁にもたれかかって眠っていた。私は彼におはよう、と言った。彼は無言のままだけれど、笑顔返してくれた。

学校なんかよりも、よっぽど彼と話している方がいいと思った。だけど昨日は彼女の悩みを聞くことが出来なかったし、彼を連れていってしまったから彼女に謝らなきゃいけないと思って仕方なく行くことにした。

今日は食卓へ向かわずに、部屋で彼と食事をした。彼は食べたくないみたいで、何にも手をつけなかった。

今回もまた、両親は私を見てくれなかった。

今日は、普通の曇り空が嬉しく思える程に機嫌が良かった。足取りは軽く、少し鼻歌交じりで登校した。

学校に着いて、教室のドアを開けると、クラス全体が妙に騒がしいことに気づいた。

私がいることに気づくと、少しずつひそひそとした、噂話みたいなトーンに変わる。最初は、誰かの恋愛話かな、と思ったけれど、どうやら興奮の仕方がそういう話題ではないことを示している。

邪悪さの入り混じった空気が教室を包んでいた。

今噂されている重そうな内容が、私に関連することであるのは明らかだった。今まで晴れていた私の機嫌が一気に悪くなった。そして同時に、少し不安にもなった。

……私が何か噂のタネになるようなことをしてしまったのだろうか？ それとも、誤解を招くようなことをしてしまったのだろうか？

話の中身を聞いて弁解しなければいけない。私はクラスの中の空気のようなものでなければいけないのだから。

どうしたの、と私は名前も覚えていないクラスメイトの一人に近づいて問いかけた。平静さを装って。

そして、その答えに、私は戸惑った。

彼女が、失踪した。

……いきなりのもので、ただ驚くしかなかった。

呆然として突っ立っている内に、彼女達の話し声が嫌でも耳に入ってくる。

「家族みんななくなっちゃったんだって……」

「四組にいる、隣に住んでる子が発見したらしいよ。その子さ、半狂乱になってうちのクラスのみみんなに知らせたんだって……」

「もしかして借金が原因かもしれないって……」

「え、でも私は彼氏関連で揉めてるって聞いたよ……」

「血がいろんなとこに付着してたんだって～」

「うっそお、こわ～い」

「嫌な世の中だよねえ、やんなっちゃう……」

「でもさ、まだ死んじゃったって分かったワケじゃないんだよね……？」

ひそひそと、音量を抑えるでもなく、おしゃべりを続ける中、私は隠れるかのよう

に自分の席につき、机の上に突っ伏した。

うるさい、黙れ。真実かも分からないようなことを無神経にぺらぺらと喋るな。

聞こえないように耳を両手で塞いでも塞いでも、無邪気という悪意の詰まった声が侵入してくる。私と密接に触れている話題が私の周りをうろうろしている。

このままだと私が決して望まないことが起きる。逃げなきゃ、ここから逃げて私を保たなきゃいけない。

「……あ、あの子なら何か知ってるんじゃない？」

一人の女子が発するその言葉が聞こえた時、私はとっさに机から顔を上げて身構えた。

違う、違うんだ。私は彼女と親しくなんかないし、何も知らない。事件と何の関わりも無い。

来ないで。聞かないで。触らないで。嫌。

私の空間を「無」以下に落とさないで……。

彼女達の足が私の机の方に動くのが、スローモーションで見えた。私はきつく目をつぶった。

嫌……っ！

……私のすぐ近くに来ようとした時、ちょうど始業のチャイムが鳴り響き、担任の教師が入ってきた。彼女達は渋々自分の席に戻っていった。私は胸を撫で下ろした。

まだ、彼女の失踪を学校側が知らないのだろうか。担任の男性教師は少し雑談を注意しただけで授業にすぐに入ってしまった。

今すぐにも逃げ出したかった。でも、クラスの人々全員に注目されてまで逃げる気にはなれなかった。プライドが私の感情を許してはくれない。平静な振りをしていても、私の視線が教室の後ろ側の扉に貼りついている。二つの考えが戦い合う。

しばらくの間逃げるか否かと考えた後、答えが出ないと気付いたので、授業の内容なんて無視して彼女のことを考えた。居なくなってしまった彼女。いない人……。

居なくなったからといって、何か私に不利益があるだろうか。………ない。絶対に大きな利益も不利益もないはず。そうでなければならぬ。彼女が私に深く根付いているのなんて許さない。

けれども、彼女が居なくなったら、私には友達と呼ばれる人が一人もいなくなるんじゃないだろうか？

確かに、彼女は私の知りうる限りで唯一の同類だった。よく話す唯一の人間だった。彼女がいなくなるのは、かなり学校での交友関係に支障をきたすのではないだろうか。

この先訪れるであろう不安のことを考えると、段々と暗い感情が私の中で増幅する。

一人になって、孤独を抱えながら休み時間と昼食の時間を過ごして、グループを作る時には必ずあぶれてしまう私の姿が思い浮かんだ。………そんな自分は嫌だ。一人だということで哀れに思われたくない。同情なんてまっぴらだ。私のプライドが許さない。

暗い考えが私の全てを埋め尽くして、こんな場所に居る気が失せた。授業の内容が急に耳の中に入ってくる。その全部が頭の底のほうで重く響いて、頭が痛くなってきた。

教科書を丸読みする時の教師の言葉が、私に向けられた侮蔑の言葉に聞こえる。かつかつ、と鳴るチョークの音が私に対していら立っている証のように思える。

全てが私に刺さって私を傷つけていく。

五十分が何時間もの長さを感じられた。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴った時、私はようやく拷問から開放された。ほっ、と安堵の息を吐いた。額には、うっすらと汗がにじみ出していた。

そうだ、こうしてはいられない。逃げなければいけない。この空間から一刻も早く

脱出しないと私が壊れてバラバラになってしまう。

私はすぐさま、荷物を持って席をそっと立った。一応、気分が悪そうに周りに振舞ってから、教室を出て保健室へと向かった。

演技で保健室の先生を誤魔化して、すぐに早退した。校庭を出るまでは病人らしくゆっくりと歩いて、学校から少し離れた時に、全力で駆け出した。

不安が私の足をがむしゃらに走らせる。自分の限界なんて無いかのように、早く。頭の中は、学校から離れること以外は真っ白だった。

学校が駄目なら一体私はどこに行けばいいの？ そんな疑問が浮かんだ。

その時、私は自分が家路を急いでいるのに気づいた。いつもの癖で足が自然に我が家へと向かっていた。

……そうか、彼がいるじゃないか。私の家には彼が居る。いつも純粋で、いつも微笑んでいる彼が。

私の居場所がそこにはある。

まだ私はこの世界からのけ者になんかされていない。

家に着いてすぐ、邪魔なカバンを放り投げ、靴も脱がずに、「ただいま」とも言わずに、両親なんて全く気にもかけずに、自分の部屋へ飛びつくように向かった。

階段を乱暴に駆け上がる、どしどしという音がする。その音よりも大きく、はあはあと自分の荒い吐息が耳に刺さるように響く。

勢いよく自分の部屋のドアを開け放ち、すぐ前の壁にいとわかっている彼に飛びついた。ただいま、と彼の顔を見て言った。そして力強く彼を抱きしめた。それでも彼は何も言わずに、されるがままだった。

彼の体に触れていると、不安があつという間に消えていく。今まで脅えていたのが嘘みたいだ。

彼の体は冷たいはずなのに、私の体が温かくなっていく。

海の中を漂っている時のように、気持ちがゆったりとしていく。布団の中とは比べ物にならないくらいに気持ちいい。体中の緊張がほぐれて、全身から力が抜けて彼に全てをあずける。

だんだんと、眠りにいざなわれていった。

朝の光に目が覚めて、ゆっくりと彼の体から上体を起こした。覚えている中でも一番気持ちのいい朝だった。

おはよう、と笑顔で言ってもう一度彼に抱きつくと、体がますます温かくなっていく。

気分はすっかり落ち着いて、頭の中が少しずつ整頓されていく。今までであったことや、これから起こりそうなことなどがたくさん、パズルのピースみたいに心の形を作っていく。要らないピースが選別されて棄てられて、頭の中と心を軽くしていく。

そうしている内に、一つのピースが見つかった。

そこには、「彼女がいなくなったら私はひとりぼっちになってしまう。学校に居られない」と書いてある。

理性の働き始めた頭でそのピースの真質を見極めようとする。丁寧にその形や絵柄を眺めながら他のピースと比べていく。

本当にそうになってしまうのだろうか？ ふっ、と疑問に思った。

いや、そんなことはない。別に彼女がいなくても、学校で一人ぼっちというわけじゃない。だから堪えられるはず。周りには、友達とも呼べないような話し相手のごろごろしている。それらの人々と、授業のこととか、テストや受験のこととか、先生に対する愚痴とか、天気のこととか、とにかく私に深い関わりのない話をして表面上の関係を保てばいい。

そうすれば私の心も保たれる。今起きている事件との関連性を否定して乗り越えれば、後はぬるま湯の生活が待っているはず。少しずつみんなと話せるはず。

それらは、彼女との関係のおかげで手に入れた盾と糸。だから、今までの彼女は必

要だったけど、今はもう居ても居なくてもいいんじゃないのかな。

「ありがとう」。今は帰ってくるかどうかということも、彼女の安否もわからないから、彼女の結果を知った後にそう言って感謝しよう。

クラスの人々の姿を想像してみると、今まで色褪せて見えていた人々が、急に鮮やかな色を帯びていくような気がした。それが心地良くて、しばらくの間はその空間の変化を楽しんでいた。

学校に居ても大丈夫そうだと分かったから、今日はちゃんと登校して真面目に授業を受けることにした。少し早めに家を離れた。

朝の太陽が雲から抜け出して輝いていた。

学校に着いた後、教室に向かう前に洗面所に行った。顔を洗って頭の中をすっきりさせた。

それは、冷静に思考し、噂が流れる時期を乗り越えるためであった。

誰も周りにいないことを確認してから、今までに何回も振りまき続けた笑顔の練習をする。少しぎこちなかったけれど、きっとばれたりはない。

クラスメイトから投げかけられると予想される質問を想像してみる。細部をぼかしつつ友達らしい返答を考えていく。

分からなかったら笑って誤魔化せばいい。大丈夫。心配することなんてないんだから。

そうやって自分を勇気づけてから腕時計を見ると、いつのまにか教室に行くぎりぎりの時間になっていた。大きく一回深呼吸をして、胸を張って歩き出した。

教室に入って席につくと、すぐに教師が現れた。

一時間目が終わった。休み時間が始まって、にぎわいが学校全体を包む。ずっと待ち構えていたかのように、クラスメイトの内の何人かが私のほうを向いた。

少しドキリとした。

大丈夫。きっと大丈夫だから。そう自分に言い聞かせて話し掛けられるのを座って待った。

彼女達が近づいてきた。私と少し距離を取って立ちはだかる。

「……ねえねえ、あの子がいなくなってから連絡ついたの？」

私は、悲しそうな表情を作って、首を振った。内心ではほっとしていた。

「そうなんだ……、あ、そういえば、ようやく警察が捜査を開始したんだって。……早く見つかるといいよね。」

最初とは別の女の子が言った。私は、うん、と弱々しくつぶやいてうなづいた。

ほっとした気分であるところに、一人の女子が割り込んできた。どすどすと音を立てて。

「……あ、あの失踪した子の話でしょ。なんかカワイソウだよ。あ、でもさ、あの子ってさ、今だから言えるんだけどかなり生意気だったよね〜。」

私は耳を疑った。予想外の言葉に頭が混乱して反応に困った。何を言っているんだ？

「……！ ちょっとやめなよ〜、あの子がいなくて、この子弱ってるんだから。」

さすがに、別の女子が嫌そうな顔をして注意した。注意された女子は少し不機嫌な顔をして話を続けた。

「……あの子の家には、血が超たくさん付いたらしいから生きてるわけじゃない。あの子のこと気遣うのはいいけど、それくらい覚悟しといたら〜？ あ、そういえば、四組の、あの発見した子が言ってたんだけど、あの子の家族ってかなり評判悪いんだってさ。なんだか、家族全員が近所にあいさつもしないし、平気で禁止されてるペットを飼ったりしてたらしいし〜。」

何を言っているのか理解できない。言葉は日本語であるはずなのに、聞き慣れない言語のように耳を素通りする。この女は本当に日本人なのか？

「え、うっそ〜！ 信じらんないね〜。あ、誰かが言ってたんだけど、あの子の親って仲が陰悪で、いっつも隣の家に夫婦ゲンカの声が聞こえるんだって。母親はお水

で、父親はぐうたらで、二人ともすぐにキレちゃうらしいよ～。だから職場を転々としてるんだって。その間に恨みなんかいくらでも買ってるんじゃない？」

さっき注意していた女子が話に加わり始めた。

私はただ呆然としていた。

話がだんだんと広がっていく。私を取り囲んだ5, 6名の女子どもが、ぺらぺらと彼女についての根も葉もない噂を垂れ流していく。やがて、話していることが全て真実であるかのように決め付けられて話が進んでいく。

彼女の欠点とか、彼女は殺されて当然だったとか、彼女の長所を裏返して話して短所として扱ったりしていく。私は、顔をうつむけて机に突っ伏す形で耳を塞いだ。

あっという間に、当事者たちを取り残して事件が小説のように造られていく。こてこてにデコレーションされていく。有り得ないような内容までもが彼女達の手によって真実のラベルを貼り付けられ、真実を完璧に覆い隠す。

私の頭の中の教室の映像に、彼女の姿が無い場所、女子どもと私との間に、歪んだ笑みを浮かべる彼女の虚像が出来上がった。

あははははははははははははは。

突然彼女が笑い出した。誰に向けてでもなく、周りの全てを軽蔑するかのようには笑い続ける。

彼女の周りに、ぬうっと何本もの手が現れて、赤に緑、黄色など、色とりどりの、けれど毒々しい感じの飾りが付けられていく。体の内で、飾りが付けられているのは手足、頭、胴体など、人の目につく所ばかりだ。

あっという間に、彼女の服は飾りでぎっしりと埋められて、重そうな姿となった。

それは、紺色のクリスマスツリーを連想させる姿だった。

クスクスクスクス……。

彼女は両手を横に大きく広げ、じゃらりと音を立ててゆっくりと体を左回りに回転させていく。

じゃらり、じゃらり。重そうな制服のスカートが浮き上がり、彼女が回っていく。髪の毛が、さらっと舞う。

じゃらり。顔の左半分が見えた。私と目が合って、ぐにやりと彼女の目が笑って細くなった。

じゃらり。顔が全てこちらに向いた。その口元は、にやりと笑っていた。

次はあんたの番だよ、と表情が喋っていた。

途端に背筋が凍るように冷たくなる。彼女が私の前から消え失せた。テレビの画面が砂嵐になる時のように、ざざと残像を残しながら消えていく。

きゃはははははははは！

完全に姿が見えなくなってから発せられたその声が、耳をつんざくように響いた。

体中から汗が噴き出していく。私は目を見開いて、動揺を隠せずに、おそるおそる顔を上げた。

いつのまにか女子どもの視線が私に向けられていた。

一つしかなかった玩具に遊び飽きて、新しい物を探しているような目。飢えた目。

(次はあんたの番だよ。) 頭の中でもう一度響いた。

「……ねえねえ、何か事件の犯人とか動機とか知らないの？」

ついに私に質問が投げかけられた。できるだけ動揺を表に出さないようにうつむいて、私は事件のことを何にも知らないけど、彼女がすごく心配だよ、早く一緒に遊べるといいな……、私も頑張ってみるよ、と言った。自然な、ごく自然な対応を心がけた。

そのはずなのに。

女子どもの一人の、最初に話の展開をぶち壊しにした人間がこう言った。

「……あなたって、絶対何か知ってるでしょ。」

私の体がびくりと跳ねた。

やめて！ 心が叫んだ。

どうして私のことを知ったつもりになって勝手に決め付ける？ あんたは超能力者のつもりなのか？

「……当たり前でしょ？ ねえねえ、そんなに顔伏せてないで私達にも教えてよ～。私達が捜すときに役に立つでしょ？」

彼女のことを話したとしても、どうせ自分達の話のネタになるだけだ。あんた達は、現実の彼女なんか要らないんだから、捜すわけがない。ツリーを見ながら、はしゃいでるだけで満足なんだ。

「……聞いているの？ もし彼女のプライバシーに関わることでも悪用したりしないからさ～。彼女のためになるんだから打ち明けようよ～。私達友達でしょ？」

そんなわけがない。例えば学校で話す人間があんた達しかいなかったとしても、絶対に友達じゃない。

けれど、そんな私の気持ちは置き去りにされていく。その女子は、私に質問をする振りをして自分の意見に同意させている。馬鹿で人の中身もろくに判断できないくせに、自分の非を認めたくない愚か者なのだ。

彼女の脳内では、「私」は仲良しで気兼ね無く話すのが普通の友達となってしまった。「私」が、書き換えられて落ちていく。

きっと、私は少しでも真実めいたデマを言うべきなんだろう。しかし、私は嘘が上手くない。今嘘をついたとしても、嘘で塗り固めていくうちにいつかはバレる。きっと彼女達はしつこく詳細を問い詰めようとするから。

そして何より、落ちていく「私」をこれ以上演じたくない。

だから、私は本当のことを言うしかない。

何も知らない、と優しい口調で言おうとしてその女子の顔を少し見上げた時、私の動きが止まった。

……その眼は、冷たくこちらを見ていた。有無を言わせない、虎のような眼が私を睨んでいた。

自分の言葉を否定し、機嫌を損ねるようなことを言えば、すぐさま私を食い殺すという意思表示。

そっと左右に眼を向けると、他の女子も私の答えを待っていた。反抗した時に私を食べる準備を心の中でしているに違いなかった。

冷や汗が、背中の辺りでびっしょりと制服を濡らす。頭の中が恐怖と動揺でごちゃごちゃになっていく。

何を答えればいいのか分からなくなった。イエス、と一度答えてしまえば、きっと二度とノーと言えなくなる。彼女達といくら仲良くしても、女子どもはいつでも、私を食べることのできるように虎視眈々としているに違いない。そうなると一生彼女達に付いて行かなければいけない……「私」を殺しながら。

そんなのは……嫌だ。

どちらの選択肢を選んでも、食べ尽くされて骨しか残っていない彼女のようになる時は近いのだ。

彼女は、噂としてクラスの舞台の上に上がってしまったから女子どもに狙われてしまった。そして、私は彼女のすぐそばに居たから次の目標に見定められてしまったのだ。

私は押し黙ってしまった。びくびくと震えながら、さながら小動物のように。

答えなかったことが女子どもの癪に障ったのだろう。彼女達の表情が険しくなっていく。

全てが予想を裏切って進んでいく。こいつらは私の気持ちなんて知りもしないし聞きもしない。ずかずかと私の中に深く入り込もうとする。私の教室を壊していく。

どうして？

頭の中が真っ白になっていく。

どうしてこんなことになったの？

何も考えられない。答えは出ないまま、質問だけがぐるぐると私の脳内を掻き回す。

嫌……………。

わけが分からなくて頭の中がぐちゃぐちゃになった。

何か、何か打開策は無いの？

必死で自分の考えの中を捜し求める。そして、しばらくして私の混乱の増幅が止まった。

あ……！

ある考えにたどり着いた。混乱している中で、何かにすがらなければ自分が保てない。

そうだ、こんな馬鹿げたキャストの芝居はもう見たくない。

その思考にすがりつく。混乱した頭の中は一掃されて、その考えだけが頭を埋め尽くす。だんだんと悲しみも無くなっていく。

もう、そうするしか道はない……！

精神が高揚して煮えたぎる。心が希望で溢れる。

私の全てが、その行動になった。

あああああああああああああああ！

私は、突然獣のように叫び出した。

机を右手で横に弾き飛ばし、最初に私の教室をめちゃくちゃにした女子に飛び掛かる。

がたん！ 私の机が別の机とぶつかる。

床にその女子を押し倒して、その細くもない首を絞めていく。血眼になって、全力でそいつを破壊しようとする。

頭は真っ白で何も考えられない。何も感じない。

首を絞めている手の感覚も、さっきまで痛んでいた頭の感覚もない。

ただ、熱だけが頭を占めている。

ぐ……あ……あつ。

その中に、一つのかすれた声が聞こえてきた。最初は誰の声か判らなかった。そして次第に、今首を絞めて殺そうとしている女子のものだと分かる。

……………？ こ、ろ……、す？

疑問が頭の中でざわついた。頭に水を含んだ異物が紛れ込んで、意識が少しずつはつきりとしていく。

そして。

きゃあああああああああああああ！

耳に響くのは、きいん、と耳鳴りがするような大きな悲鳴。複数の声が折り重なって響き、頭の中をぐあんぐあんと回っていく。

ようやく、自分が何をしているのかが分かる。

理性が、回復した。眼だけを横に向ける。

恐怖して叫ぶヒト。怖くなって隠れようとするヒト。パニックになって逃げ出すヒト。たくさんのヒト。

でも、みんなに共通してることは一つ。

みんな、私を拒絶している。

そして、ぱっ、と私は首から手を離した。

私の体は震えていた。また、頭の中がめちゃくちゃになっていく。なんとか、崩れ落ちそうな体を支える。

私は、いつのまにかカラカラになったノドから声を絞り出していた。

「違う……こんなことがしたかったんじゃない！」

私の叫びは空しく、弱々しく喧騒の中に消えていく。

私の目には涙が溜まっていた。
ぼたりと、雫が垂れた。
何も考えられず、眼を見開いて呆けたまま、救いを求めるかのように、ざわめきの
中で彼女の席を見ようとした。ゆっくりと顔をそっちに向けた。
……そして、驚愕した。
そこだけが、白黒に染まっていた。生を感じさせない色になっていた。
「居ない」空間。
「居ない」時間。
居るはずなのに「居ない」。
もう駄目だ……。彼女が、彼女が居ないと……。私は何もこの学校に期待できな
い。裏切られる。
そう考えた後、私はぶんぶんと首を振ってそれを否定した。
違う！ ……違う、そんなのじゃない。今、分かった。分かってしまった……。
私は彼女にしか期待してなかったんだ。彼女しか私の気持ちを汲み取って期待通り
の反応をしてくれる人はいなかったんだ。あとの人はみんな他人だったんだ。
最初からこの学校やクラスの人々に期待なんかしていなかったんだ。
そう気づいた時、彼女の席の周りの、白黒の空間が歪んだ。
いきなり、爆発するみたいに白黒の空間がカラーの空間を侵食し始めた。ざざざざ
ざ、と教室が見る見るうちに色を失っていく。ざわついているクラスメイト達をあっ
という間に呑みこんでいく。
世界を汚染していく。
途端に、私は立ち上がった。
駄目だ。こんな空間に私はいられない！ 一欠片も先の見えない場所では私は生き
ていけない！
逃げなきゃ。逃げて、どこか、色のある場所へ……！

全力で教室を飛び出す。急速に白黒の空間が学校中を覆おうとしているのが見え
る。
まだ色の残る所に逃げなきゃ……。
でも、何処に？
彼女がいない学校に、そんな場所なんてあるの？
それでも、私は走る。色のまだ消されていない所を目掛けて。白黒になった人々を
モノのようにどかしながら、ひたすらに走る。汗が頬を伝って首に流れていく。息が
荒くなっていく。
けれど、私の周りは視界の限り色を奪われてしまった。
私は学校を急いで出た。そして校舎の全体を眺めた。
学校全てが色をなくしていた。
もう、居られない。
じわじわと、今度は学校を拠点に町を侵食し始める。
町に向けて私は走り出した。
建物を、木々を、空を、人々を、全ての世界が汚染されていく。
やめて！
私は必死に走った。汚染の速度を超えて、色を獲得したくて。
私を拒絶しないで！
汗だくになって、荒い息しか聞こえなくなった。喉は限界を超して悲鳴をあげてい
る。口の中に血のような鉄っぽい味が広がる。
しかし、努力も空しく侵食の手はあっという間に伸びていく。
上空の、見える限りの一番向こう端に、まだ侵食されてない空が小さく見えた。そ
の空が、全方向から染められていくのが見えた。
やがてすっぽりと、その空が包まれるように消された。
空が全て白と灰色に染まった。それは、世界の全てがそうなったのと同義だった。
自分の右手を見た。私だけが、景色の中で彩られている。

足が、走るのをやめた。体中から力が抜けて一気に私は地面に崩れ落ちた。とっさに手を付いて四つん這いになって体を支えた。

その衝撃で、手に痛みが走った。じわじわと出血していく感覚がする。痛み、顔が歪む。

もう……だめだ。希望が途切れてしまった。世界のどこにも私の居られる場所はない。もう生活なんてできない。学校にも行けない。社会になんて最初から居られなかった。じゃあどうすればいいの？ 私は……。

その時、突然頭にひらめいた。

！ あ……、わ……たしの、家は？

彼は？

そう思いついた途端、急に全身の疲れが無くなった。すぐに体を起こした。

そうだ、他の全てが駄目でも彼がいるじゃないか！ 彼さえいればいいじゃないか！

もう一度走り出した。早く家に着きたい一心で、全力を出す。それでも体は軽やかで、気分は晴れやかだった。

汗がひんやりとして気持ち良く、風が私の体を包む。

すぐに家に着いた。私の家も、既に汚染されていた。

でも私は迷わなかった。

扉を開けて玄関へ飛び込み、靴を脱ぐことなど忘れて、まっすぐに二階へと向かう。

どたどた、と灰色の濃淡しかない階段を駆け上がって部屋の方向を向いた。期待を込めて。

そこに見えたのは、私の部屋のドアの隙間から漏れ出す光だった。私は安堵した。

そして、待ちきれなくなってドアを開けた。楽園を信じて。

ただいま！

……ひゅううううっ。

微かな風が窓から吹き込んでいた。風でカーテンが揺れている。雑然とした部屋の中に、壁にもたれているはずの彼の姿がない。

彼の姿だけがない。

……そんなはずない。そんな、はず。

がささつ、と必死で荷物の山をあさり始める。埃が部屋中に舞う。手でがむしゃらに掻き分けていくから、ゴミや雑誌が左右の壁や家具にぶち当たる音がする。

手当たり次第に捜していく。彼が隠れるような空間のない場所まで、とにかく血眼で探し続ける。

タンスの中の服が宙に次々と舞う。頭に被って視界を遮ったそれらの一部をどけることもなく、一段目から一番下の段まで全ての引出しが開け放たれて捜索されていく。

最後には引き出し全てを抜き出して、その奥の真っ暗闇まで覗き込む。

次にベッドの上の布団をひっくり返し、そこに何もなかったことが分かると、布団を手で引き裂いていく。もう、自分が何をしたいのか分からない。

彼は居なかったから、ベッドをひっくり返して探した。

そうしてかなりの間、私は部屋を探し続けた。

すべての家具と小物とポスターが床に散らばりきって、床以外の場所に物はなくなった。ごみのように、色々な物が一段と大きな山を作っていた。壁が全て見えるようになっていた。

はあはあ、はあはあ。

息がものすごく荒いのが分かる。

少しずつ頭が冷えていく。そしてようやく、もう彼の隠れる場所など残っていないと気づいた。

……認めてしまった。
急に、部屋の色が消えてなくなった。
本当に全てが白黒になってしまった。

「……そんなの……嫌あああ……。」

思ったことが口に出ていた。両手で口を抑えて、震える。怖くて、怖くて、現実を見たくなくて部屋から逃げ出そうとした。うまく歩けなくて、体がよろめいた後に転んだ。無様な格好で、這いずる様にして部屋から抜け出した。

部屋から出た後、私には何の考えも希望もなかった。
廊下に座ったまま、ぼうっとしていた、
はずだった。

いつのまにか、体が立ち上がっていた。そして、動き出していた。

「お……かあ……さん、おかあさん、お母さん……！」

無意識の内に声が絞り出される。手を左右にさまよわせて歩く。何回も、何回もゆっくりと母の名前を呟きながら階段を一段ずつ早足に降りていく。

階段を降りきって、私の足は右へとすぐに向かう。ずっと母の名を呟き続けたまま、母の部屋のドアを開ける。ドアにも、ドアからにじみ出ているはずの光にも、既に色は無かった。

それでも、希望があった。

母の姿が目に入った。母が、いつもと変わらずに、そこに居た。母の姿には、色が残っていた。

おかあ……さん！

衝動的に、私は母に抱きついた。

かちり。運命の歯車のような音がした。

力の限り抱きしめ、もう絶望的でどうしようもないことを早口で話し掛けた。

彼女のこと、クラスのこと、学校のこと、社会のこと、

そして、彼のこと。

自分でも何を言っているのか分からないほどに支離滅裂なことを口走っていた。

母が何かしら言葉を発していたけれど、耳に入らなかった。ただただ、自分の言いたいことを喋っていた。

ずいぶんと話して、言葉を止めた。

はあ、はあ、はあ……。喉が擦り切れそうになっていた。

しいん、と静寂が私を襲った。それが無性に怖くなって、母さんに問いかけた。

どうしようもない質問を。

「……ねえ、私はどうすればいいの？」

分かってる。答えなんかないんだ。答えられるわけじゃないか。

ほら、母さんだって言葉に困ってる……！

「麻子、大好きだよ。」

何かが聞こえた。最初、何を言ったのか分からなかった。

少しずつ、時間が経つに連れて、混乱した精神が落ち着きを取り戻していった。

そうして、ようやく何を言ったのかを理解できた。

(麻子、大好きだよ。)

頭の中に声が響いた。いつものように少し硬い声だった。冷たささえ覚える声。

でも、脳内にその台詞が反復する。ぐるぐると、頭を駆け巡って他のことを真っ白にしていける。

……ぼつり。

手に、雫が落ちた。自分は泣いていた。

そう気付いた途端、涙がとめどなく溢れてきた。どんとんと手が濡れて、次第に手

を伝って落ちていく。わけも分からず、ただ、嬉しくて嬉しくて、一生分の涙を使い果たす位に泣いていた。

「—————？」

誰かの声が、ぎゃあぎゃああと鳴くカラスみたいに後ろから聞こえた。だけど、頭の中では嬉しさが渦巻いていて、その言葉は聞き取れなかった。

私はまだ泣いていた。少しずつ、流す涙の量が減っていくのがひどく悲しかった。だから、言葉が聞きたくて、必死に母に話し掛けた。

適当な相槌が返って来た。

それが妙に、親しさの証に思われて喜びが沸いた。

適当な質問が返って来た。

それが妙に、正常な現実の中でのありふれたものだったから、悲しみが消えていった。

私はぼろぼろと涙を流しながら、母を抱きしめたまま話し掛け続けた。

カラスの鳴き声も聞こえなくなった。体が浮いているみたいに感覚がなくなっていく。

そして、ずっと私達の会話は噛み合わずに続いた。

世界では、ここだけに光がある。

そして、きっと永遠に光るのだ。

*

ドアが勢い良く開いた。一人の女性が慌てた様子で入って来て、床に座り込んだ。部屋の奥にいる少女を見て安堵の息を吐く。

「あっ！ 見つけた……！ もう、探したんだよ？ ……はあ、良かったあ〜。

—————あ、私ね、下宿からこっそりと帰ってきたんだよ！ 驚いたでしょ。」

オーバーな動作で思いっきり深呼吸をして、荒かった息を鎮める。不安から開放された嬉しさで顔を一杯にして、少女に話し掛ける。

「ねえねえ……、このぬいぐるみって何？ 今こんなブキミなのが流行りだったけ……？」

そう言って、両手で抱えていたぬいぐるみを少女の方に向ける。それは、全身が真っ赤に染まっていた。

「もう、ビックリしちゃったわよ。麻子ちゃんの部屋に入ってみたら、いきなり居るんだもん。気が動転しちゃって、思わずこの子ごと交番に走っちゃった。……ふう、途中で引き返してきて良かった〜！ 赤っ恥かいちゃうところだったわ！」

彼女は一人で大笑いした。

しかし、少女は全く女性の声や動作に反応することなく、うずくまって必死に誰かに喋り続けている。何を、誰と話しているのか、少し遠くに居る女性は明確に聞き取れないようだ。そしてようやく、女性は少女の異常に気付く。

「……麻子ちゃん？ ね、ねえ、麻子ちゃん？ 私だよ、お姉ちゃんだよ？ どうしちゃったの……？」

やはり反応しない。女性は少しずつ慌て出す。

「ねえ……、どうしたの？ 何か変だよ……。どこか痛い？ あ、そ、そういえば母さんと父さんは仕事？ どうして麻子が母さんの部屋に居るの？」

おそるおそる、女性は彼女の方に向かっていく。一步ごとに、不安と恐怖が女性を襲っていく。

「麻……子ちゃ……ん？」

ある程度まで近くに寄った時、女性は足を急に止めた。女性の顔は、青ざめて恐怖にひきつっていた。

部屋の奥に居る少女は、早口で何かを喋っていた。早すぎて何を言っているのか聞き取れないし、そもそも話していることが滅茶苦茶のようだった。

涙をぼろぼろと流しながら何かに抱きついていて、その何かに向かって話しかけている。

そして、その何かがきちんと言葉を発しているのだ。妙に均質で機械的な声で、少女の言葉に何かを返している。

「—————！ ねえ……、麻子っ！ 本当にどうしちゃったのよお！ ねえ！」

女性はよろめいて倒れるようにして少女に飛びついた。唇を震わせて、女性は少女の肩を揺さぶる。女性の眼には涙が溜まっていた。

いくら少女を揺すっても、彼女は何かをきつく抱きしめたまま、話し掛けていく。

「麻子ってば……！」

どンドンと肩を揺さぶる力が強くなっていく。肩を掴む指にも力が入っていき、少女の肩に長い爪が食い込む。それでも、少女はがくがくと揺れたまま、壊れた人形のように言葉を発し続けていく。

「ひいっ……！」

ついに、訳が分からなくなると女性は肩から手を離した。その指先は赤く血がにじんでいた。

いきなり揺さぶられるのが止まったため、少女の体は前に勢い良く倒れた。体が床に叩きつけられた衝撃で、少女の腕の中の何かが床に転がる。

ごとん。

……………それは人形だった。

人の言葉に反応して言葉を返す機械人形が転がって、壁にぶつかった時に無機質な言葉を話すのが止まった。

そして、少女は倒れたまま、笑顔で喋っていた。不気味なまでの笑顔で。

「きゃあああああああああ！」

もう、女性は恐怖で泣き叫ぶしかなかった。

「おかあさん……どこ……？」

少女がゆっくりと起き上がって周りを見渡した。その表情には酷く不安が混じっていた。

そして、少し離れたところに転がっている人形を見つけて——笑った。

女性が今までに見たことのない位に 純粹に、心から嬉しそうに笑っていた。そんな幸せに満ちた表情を見て、叫び疲れてぼうっとしている女性はこう思った。

(これは……狂った夢？ それとも救い？)

そして、少女はもう一度人形をきつく抱いた。

かちりと音がして、人形が喋り出した。

そして、少女は人形に話し掛ける。

「ここにいたんだね、おかあさん。」

[戻る](#)

